勉強部

yumesato

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勉強部

【Ｎコード】
Ｎ９１７８Ｎ

【作者名】
ｙｕｍｅｓａｔｏ

【あらすじ】
落ちこぼれになった主人公が、少女の出会いをきっかけに更生していくお話

プロローグ（前書き）

初投稿です。至らないところが多々在ると思いますがよろしくお願いします。
改善点とか、感想とか頂けるととても喜びます。

プロローグ

中学生の頃は成績が良かったのに、高校生になると転じて落ちこぼれになる
やつは少なくない。俺もその一人だ。
中学生の頃は、テストなんて前日位から徹夜して勉強すればすんなりと好成績が取れた。
それでも、クラスメイトの中では勉強をしないで無様な成績をとり落ちこぼれている。
俺はそんな奴等と比較して成績上位にいることに優越感を感じていた。
だから、この付近で一番偏差値の高い高校に入学すればさらなる優越感に浸れると感じ、塾に入り懸命に勉強をした。
結果、第一志望の高校に入ることができ、そのときの優越感は極上のものだった。
しかし、高校に入ってからは状況が一変する。結論から言うと、周りについていけなくなったのだ。
授業の内容のうち、半分も理解ができない。
異常なまでに多く出される課題。早朝からの補講。
そしてそんな過酷な状況にあるはずなのに、それに順応している周りの生徒達。何で周りの奴等は、そんなに黙々と勉強をし続けることができるのか、理解することが出来なかった。
俺の成績はすぐに落ちていった。
張り出される成績表の最下位付近には、常に俺の名前が書いてある。
今ではそれが当たり前となってしまっている。
そして高校生になり、一年が経過した頃、もう何もかもどうでもいい。
こんな学校辞めて、どっか適当な就職に就こう。
そう思い始めた矢先の頃だった――

【第一章】１－１．そして彼女は現れた

４月下旬の放課後。帰宅準備をしていたところに一人の生徒が俺に話しかけてくる。
「君って器用な眠りかたしているよねー。目を開けたまま寝てるなんて常人にできることじゃないよー。あ、私の名前分かるよね？クラスメイトなんだし」
「えーと……ごめん、でてこない」
「えー！？なんで！信じられない！私の名前は、林道楓（りんどう かえで）というか君の斜め後ろの席なんだけどなー」
ああ、そういえば自己紹介の時に聞いた覚えが。

「明日、化学のテストがあるでしょう？」
「？それがどうした？」
「私と勝負しない？テストの点数で」

何を言ってるんだと思った。今、俺が勉強中に目を開けながら昼寝をしているという事実を知っていながらテストで勝負だと？
「嫌だよ。だいたいなんで俺が負けてると分かっててそんな勝負を仕掛けてくるの？わけが分からない」
「ううん、君にも勝つ猶予はあるよ、だってこれみてよ」

そういうと、林道は一枚の折りたたまれた紙を鞄の中から出す。そしてそれを俺の机の上に広げた。
それは、先週あった実力テスト表の順位表だった。

「ここを見てよ」

そういうと彼女は、順位表の右下……つまり、成績下位者の名前が載っている場所だった。

「２３１位、桂馬（けいま）　聡史（さとし）２３０点。そして、２３２位……」

林道楓（りんどう かえで）２１０点。

「お前、俺より低いのか……」

「そうだよー。だから君の勝つ可能性も十分にある！だから、勝負しよう！」

確かに、俺が勝つ可能性もあるかもしれない。しかし……

「仮にそうだとしても、それで俺に何のメリットがあるんだ？これで俺がお前に負けたらただの恥曝しじゃないか」

「ふふん、そこはちゃんと考えてあるよ。」

「なんだよ、それは」

「私になんでもひとつだけ命令できる権利」

「……」

俺は絶句した。彼女は何てアホなことを言っているのだろうか……。

「おまえ、言っている意味分かっているのか？」

「うん、分かっているよ。

あんなことやこんなことを命令されても私は、ぜ、絶対に拒まないんだからね！」

そういう彼女はすこし赤くなっているように見えた。

そんな彼女の姿が微妙にかわいらしく感じた俺はきっとどうかしている。

「でもね！もちろん、君が負けた場合君にはあることをしてもらうよ」

「やっぱりそういう意図があったのか。なんだ、それは？」

「それはねー、私の所属しているサークルに入ってもらうこと！」
なるほど……ようやく彼女が俺に勝負を挑んできたわけが分かった。
さて、どうしようか。この勝負乗るべきか、乗らざるべきか……
そう思ったが、実はもう自分の中では答えは出ていた。
「いいぜ、その勝負うけてやる」
「本当！いやったぁ！でも驚いたなぁ、正直断られるかと思っていたよ。
何で勝負を受けたか聞いてもいい？」
「……ただの気まぐれだよ」
「ふーん？まぁいいや。じゃあ明日の勝負楽しみにしているからねー！バイバーイ！」
そういいながら彼女は、教室を去っていった。
「……」
勝負か……。さてどうするかな……。
そう思いながら、俺は教室を出た。

１―２．久しぶりの勉強

学校から１０分間歩いたところに駅があり、そこから電車で二駅ほど行った所で降りさらにそこから１５分自転車を走ったところに我が家はある。まぁ、遠くも近くもないところにあるわけだ。

「ただいまー」
「あ、お帰りお兄ちゃん」
「里子（さとこ）、今日は部活休みなのか？」
「うん、まぁちょっといろいろあってね」
「？ふーん」

そんな会話を妹としつつ、俺は自分の部屋へと向かう。
部屋には、ベッド・本棚・クローゼット・タンスの他には机しかない。
基本的に部屋に物を置くのは嫌いな性分なのだ。
制服を脱ぎ、私服に着替える。本来ならここで部屋を出てリビングでだらだらとテレビを見るのだが、今日はそうしない。

「この机と向き合うのも2ヶ月ぶりか」

前に向き合ったときは、期末試験の補講のための勉強をするためだった。
あのときはなんとかぎりぎり赤点を逃れたっけ。
ほこりかぶっていた机の表面をティッシュで軽く拭き、いすに座り机に向かう。そして、鞄から化学の教科書とノートを開ける。
「テスト範囲はどこだったけな……」

ノートに（一応）メモしていておいた試験範囲を見て、教科書の範囲の始まりのページを開く。
そして、ざっと流して読んでみる。

「なるほど、ぜんぜん分からない」

しかし、ここで諦めるわけにはいけないのだ。

「有機化合物とか無機化合物とか全然分けわからん。周期表もまだ覚えていないというのに……しょうがない」

俺は、まず周期表を覚えることから始めることにする。

「エッチーヘーリーベー僕の船（Ｈ　Ｈｅ　Ｌｉ　Ｂｅ　Ｂ　Ｃ　Ｎ　Ｏ　Ｆ　Ｎｅ）」

やれやれ、今日は徹夜になりそうだ。

夜８時、勉強を開始から２時間が経過した頃。ノックの音がしたかと思うと妹が入ってきている。

「おにぃちゃーん、寝てるの～？ごは……！？」

妹は硬直した顔でこちらを見ている。

「ど、どうしたのお兄ちゃんが勉強しているなんて！？はっ、これは天変地異の前触れかしら！？」
「なんで俺が勉強しているだけでそこまでいわれなきゃならないのか……」

まぁ、気持ちは分からないでもないけど。

一時勉強を中断して、リビングへと向かう。

「お兄ちゃんねー、さっき勉強してたんだよー。珍しいよね」

「あ、あんたが勉強……だと……？」

予想はしていたけれど、母親にも驚かれた。

ちょっとショックだった。

食後、お風呂に入り、その後すぐに勉強机へと向かい勉強を再開する。

しかし……

「うーん、ここまで分からないとは思わなかった……」

だが、ここで負けるわけには行かない。あいつに必ず勝ってやるんだ。

そのためにもあきらめてはならない。

「よっし！」

俺は両手で頬を思いっきり叩いた。

ちょっと強く叩きすぎたのか、痛かったけどやる気は十分に満ちてきた。

「さぁ、徹夜でがんばるか……！」

１―３．試験当日

「眠い……」
結局、本当に徹夜をしてしまった。
朝登校時間ぎりぎりに登校し、そして今机の上に突っ伏している。
しかし、今日の試験対策は万全だ。あいつ……林道にきっと勝てる……はず。
そう思いながら、右後ろの席をちらりと見てみる。
すると彼女も、俺と同じように机の上に突っ伏していた。
気のせいか、「う～……眠いよ～……」とうめき声が聞こえてくる気がする。
彼女も今日のテストのために徹夜したのだろうか。

そんな風にしているうちに、ホームルームが終わる。
周りの生徒たちは、ある者は友人と問題を出し合い、また別の人たちは過去門を解きだしている。
そう、化学のテストは１時間目からあるのだ。
　自分も教科書を開き、機能勉強したところの復習をし始める。
そうしていると、左後ろの方から視線を感じた。
何だと思い、後ろを見てみるが、誰もこちらを向いていない。
（……気のせいか）
そして勉強を再開する。今日の勝負には負けたくない。

　チャイムが鳴る。化学の先生が入室し、クラス委員が号令をかける。
そして、先生がテスト用紙をみんなに配り始める。

「時間は４０分。出来た者から提出すること。また、教科書・ノートの類は一切見てはならない。

ちなみに、あまりに成績の悪い者には呼び出しもあり得る。そうならないように、必死に解くんだ。では、はじめ！」

そして、試験は開始された――

試験終了後。
「ふー、ようやく終わった」
補習以外でこんな勉強をしたのはいつ以来だったろうか。
今回の試験は、この学校に入学して以来、初めて満足することが出来るものであった。
試験結果は明日の講義のときに渡されるらしい。
果たしてどうなるのか楽しみであった。
またふと気になって林道の席を見る。彼女は机の上で突っ伏していた。
（あいつもきっと力を使い果たしたんだろうな……）
そう思うと、俺も急に眠気が襲ってきた。
そして俺は残りの時間を、眠って過ごすことにした。

１－４．結果発表の日

翌日の化学の時間。

「えー、では今からテストの返却をします。名前を呼ばれたら取りにきてください。では、まず高橋君――」

ついにきた、このときが。

一人一人、名前が呼ばれていく。「よし、満点だ！」とか、「あー、こんなところミスっちゃってるよ」とか返却されたテスト用紙に対して、言及しあっている。

「次、桂馬君」

呼ばれた。俺は内心ドキドキしながら、教壇の方に歩いていく。そしてついに答案が先生の手から、俺の手に渡される。

「これからは、もっとがんばるのよ」

先生にそういわれながら返却されたテストの答案。その点数は

５９点。

ちなみにこれまで、今回のような理解度テストはほとんど０点に近いものであった。それが今回５９点だった。俺は久しぶりにがんばってよかったと本気で思った。

だが、これで満足をしていない。肝心の勝負の相手の点数がまだ分かっていない。俺は林道の席の方を見る。まだ名前は呼ばれていないのか。

そう思った瞬間
「えーと、次は林道さん」
きた、ついに来た。彼女は、教壇の方へ向かい先生からテスト用紙を受け取る。
渡されたときの彼女の顔は、とても嬉しそうだった。その嬉しそうな顔につい、ドキッとしてしまった。
あんな笑顔をしていたということは……よっぽど、いい点数だったのか？
内心俺はあせる。もし俺がまけたら、彼女に命令をすることができなくなる。
そしたら……格好がつかないじゃないか。

そう思いながら、彼女を眺めていると彼女がその目線に気づいた。
そして彼女は、自身ありげに「ふふんっ」といった態度でこちらの方を見返した。

勝負は、休み時間が終わった後。そこですべてが決する――

１―５．勝敗は決されそして――

化学の授業が終わって、周りの生徒たちは休憩や次の授業の準備に入る。
そんな中、林道が俺の席の前にやってきた。
「さぁ、勝負よ」
「……望むところだ」
俺は互いにテスト用紙を裏向けにして、互いに相手に渡した。
そして、いっせいので答案を裏返す。

結果。

桂馬　聡史　５９点
林道　楓　５５点

「あー！負けたっ！」
「よっしゃ！勝った！」

僅差で俺の勝ち。俺は彼女との勝負に勝ったのだ。

「あー、もうくやしいなぁ。私一生懸命勉強したのに。――徹夜で」
「ふふふ、悔しがったところで俺の勝ちは変わらない。それより覚えているよな、勝負に勝ったらなんでも俺の言うことを聞くって」
「えっ、い、いったかなぁ……身に覚えがないなぁ」

彼女は冷や汗をかいている。
しかし、しらばってくれてもだめだ。約束は約束なのだから。
「ごまかそうとしても無駄だぜ。俺がお前に望むこと、それは……」

「そ、それは……」
「お前の所属しているサークルに俺を入部させることだ」
「……へっ？」

彼女は理解できていない様子だった。それはそうなのだろう。それは彼女が勝利したときと同じ要望なのだから。

「それなら、今回の勝負で別に頑張らなくてもよかったんじゃ……ほらっ、君の昨日の様子を見てるとあからさまに徹夜で頑張りましたって
感じだったし」
「まぁ、そうなんだけどな。ただ……」
「ただ……」
「いや、なんでもない。それより、今日の放課後お前の所属するサークルとやらに連れて行ってくれよ」
「う、うん……分かった！」
そういうと、彼女は嬉しそうに自分の席へと戻り次の授業の準備をし始めた。

俺があんな願いにした理由。
ひとつ、単純に俺を誘ってくれたことが嬉しかった。灰色の高校生活に終止符が打てそうな気がしたから。
そしてもうひとつ、彼女のことがどうしても気になってしまったから。

もちろん、彼女の言った様に何も勉強せずにいれば俺の望みは叶った。
でも、俺はそうしたくなかった。俺は自分自身の力で望みを叶えたかった。
ただそれだけなのだ。

１―５．勝敗は決されそして――（後書き）

とりあえず、ここまでが書き溜めていた分です。
続きはこれから書いていこうと思うので、感想・批評等よろしくお願いします。

【第二章】２－１．母の夢・私の復讐

夢を見ている。私はアパートの一室にいてテーブルの前に座っている。
そのテーブルの向こう側で、嘆くような、怒っているような、何とも形容しがたい形相をしている女の人がいた。それは私の母親だった。

「はぁ……あなたはどうして、あんなことをしたの？」
「だって私はあんな所に行きたくなかった……」
「理解できないわ。いい？あなたのしたことはとても愚かなことなの。あなたは幸せになるチャンスを自ら棒に振ったのよ」

また、この夢か。
去年の3月の夢、私が第一志望としていた学校に落ちた頃の夢。

私はこの夢を見る度にいつも思う。
あんなところにいって幸せになれるなら、私は不幸でいい。
母親は私に失望し、彼女自ら私と離れて暮らすことを提案した。そして私はそれを受け入れた。
だって、分かっていたから。私と母親が一緒にいても、ただいがみ合うだけなのだから――

私の母はいわゆるエリートだった。そして努力家でもあった・自ら高卒だということを言い訳にせず、母はあらゆる手段で上を目指した。
なによりも見栄を大事にした。どんな手を使ってでも上へ上へと向

かっていく母。
そして、母はしたにいる者をみんな見下している。
幼い頃から私は母をそういう目で見てきていた。
だから、私は母が苦手だった。しかし、その一方で憧れてもいた。
でも、ある出来事から母は人が変わったように厳しくなった。
母は私にも母の理想を押しつけようとする。
「今日からあなたは、××塾へ行きなさい。でないと、あなたに今後一切お小遣いはあげません」
「あなたは今日から、バイオリンを習いなさい」
「あなたは……」
私はそんな母親の命令に従った。一度だけ逆らったことがある。
その時はまる二日何も食べさせてくれなかった。あの時は本当に死にそうだった。そして私は幼きにして悟ったのだ。
母は私を、実の娘をもただの見栄を満たすための道具としか見ていないと言うことを……

だから、私はそんな母に復讐をすることにした。それは、彼女の見栄を侮辱すること。
母は私を、都内でも有名なお嬢様学校へ入学させることを夢見てきた。その学校に入れば後の生活には一生困ることのないと呼ばれるほどだった。
母が私を小さい頃から、塾や習い事をさせたのもすべてこの学校に私を入れさせるためだった。

だから私はそれを裏切った。
私は普段から表向きは真面目に習い事をし塾にも通った。
これはもちろん母親を安心させるため。
そして、2月の入学試験日私は、一問も解答することなく試験を終えた。
結果はもちろん不合格。私は結局滑り止めで受けていた公立高校へ

と入学することになったのだ。

私が落ちたことを知ると、私を罵倒し最終的には、「あなたはもう私の娘ではありません！一人で勝手に暮らしなさい！」と言って私を一人おいて家を去ってしまった。
その後今に至るまで連絡も取っていない。

そして、高校生になってからの私はまさに落ちこぼれになっていった。
勉強なんかする気も起こらない。友達を作る気もない。
何の目標も望みのない、ただ日々をぼぅっと過ごす毎日。

それから約一年後。春、桜が散りゆく季節。私はある部活に関わることになる――

2―2．「ようこそ、勉強部へ」

テストの翌日。今日一日の授業を終えた放課後。時刻は４時半。ホームルームが終わるやいなやある生徒は友人と喋りながら帰宅し、ある生徒は部活へと向かう。そんな慌ただしいような放課後。

そんな中、俺と林道は、林道が所属しているというサークルに向かうことになっていた。

「じゃあ、早速いこうか」

林道が俺に話しかけてくる。俺はああ、と相槌を打ちながら彼女の後をついていく。

ついていきながら俺は、彼女のことを気付かれないようにぼぉっと見つめる。

身長は１５０ｃｍ位と平均より少し小柄だろうか。肩まで伸ばしたまっすぐな黒い髪の毛。凛とした表情。そんな彼女に惹かれつつある俺。こんな気持ちになったのは何時以来だろうか。

３階の教室から１階へ降り、渡り廊下を歩き部室棟へと入る。この部室棟は旧校舎を改築した建物で今では、主に文化部の部室として使われるようになったらしい。

その部室棟を奥へ奥へと歩いていく。そして一番の奥の方まで着くと彼女は立ち止まり

「ここが、私の所属するサークルの部室よ」

ドアには張り紙が張ってあり、そこにはこう書かれていた。

――勉強部

……勉強部、だと？え、マジですか。いや、確かに今まで林道さ

んに何の部活をしているか聞いてない俺が悪いのだけれど？そもそも、勉強部ってなんだ。退屈な勉強が終わってさらに勉強するというだろうか。
　そんないろいろな疑惑が一瞬にして浮かぶ。

「どうしたの？早く入ろうよ」

彼女にそういわれれ、ふと我に返る。
そうだ、俺は彼女に部活にはいるって約束したじゃないか。
それを蔑ろにするわけにはいかない。

そして、彼女は部室の扉を開ける――。

部室の中には三人いた。一人は男。なにやらぶつぶつと何か呟きながら本を読んでいる。
もう一人は眼鏡を掛けた女。そしてもう一人は、幼い容貌をした少女。身長は１４０ｃｍにぎりぎり
届くか届かないか、制服を着ていなければ小学生だと間違われるに違いない。

「部長ー。新入部員を連れてきましたー」

林道さんがそういうと、眼鏡を掛けた少女が俺の方を見る。

「ふーん、まさか本当に連れてくるとは思わなかったわ。名前は？」
「えっと、桂馬　聡史といいます」
「あら、あなたもしかして南十字中学校出身」
「えぇ、そうですけど……どうしてそれを？」
「私も南十字出身なのよ。それにあなたのことはよく知ってるわ」

俺は驚いた。俺はこの女とは面識がない。なのに相手は俺のことを知っている。
俺は怪訝な顔をして女の方をみた。

「あら、私がなんで君の事を知っているかって顔をしているわね。別に知っててもおかしな事はないのよ。君は、ある一面ではとても有名だったんだから」

有名？……ここは勉強部だ。なるほど、そういうことか。

「自己紹介が遅れたわね。私の名前は田中（たなか）唯（ゆい）。このサークルの部長をやっているわ」

そういうと彼女は、俺の方に手を差し伸べて握手を求める。
俺はそれに受け答える。

「ようこそ、勉強部へ」

2―3．自己紹介

部室の壁側には本棚がたくさんあり、沢山の本がそこに並べられている。
そして、部室の真ん中には長机が二つくっついた状態で並んでいる。
そして、机のドア側の先端方向に、ホワイトボードが設置されている。
そこには「自己紹介」と大きな文字で書かれていた。

「さて、今日はせっかく新入部員が入ったんだ。まず自己紹介といこうじゃないか。
じゃあ、最初は……齋藤(さいとう)お前からだ」
「齋藤(さいとう)　学(まなぶ)だ。」
……。
え、それで終わり？
「齋藤。お前他に言うことはないのか。歓迎の言葉とか、意気込みとか」
「ないな」
それだけ言うと、齋藤先輩はまた本を読み始める。いったい何の本を読んでいるんだろう？
「まぁ、こういう奴なんだ。こいつ本を読み始めると周りが見えなくなるんだ。本を読むとき以外は……まぁ、普通の奴だ」
なるほど。
「次は、林道……と、お前は桂馬と同じクラスだったな。今更自己紹介する必要もなさそうだが……」
「いえ、私彼とはほとんど話したことないですよー。ねー、桂馬君」
「あ、あぁ。確かにそうだな……」
実際、勝負を望まれるまでは、話しかけるどころが名前すら知らなかったからな。

「というわけで、自己紹介するね。私の名前は林道（りんどう）　楓（かえで）。このサークルに入ったのは実は3月からなの。ちなみに、出身校は北十字だよ！これからよろしく、桂馬君！」
「あ、あぁ。よろしく」

「じゃあ次は、町中」
「あ、はい」
そういうと、彼女は席を立つ。
あぁ、やっぱり背が小さいなー。
それに彼女は髪の両端をそれぞれ束ねて縛っているので、身長の低さも相まってより一層幼く感じられた。
「私は町中（まちなか）　早百合（さゆり）といいます。ちなみに出身校は桂馬先輩と同じ南十字中学校です。中学の頃は文芸部に入ってました。これからよろしくお願いします、桂馬先輩」
「よろしく、町中さん」
　先輩と呼ばれることに、照れくささを感じる。本当は俺の方が後輩なのだけど。
それに彼女、見た目の幼さに対して丁寧な子だな。

「じゃあ、最後は私だな……と、そういえばもうすませていたな。そういえば。まぁ、とりあえず君も今日からこのサークルの一員だ。よろしく」
「よろしくお願いします、田中先輩」
この先輩は、さすがにサークルのリーダーと言うこともあり、言動がはっきりしているような印象だ。
「では、次にこの部活について説明することにしよう」

２―４．勉強部とは

「勉強部ってのは、その名の通り勉強に関する議論・討論・果ては、勉強合宿・テスト対策・入試対策まで”勉強”に関するあらゆることについて行うサークルだ」
そう田中先輩は言った。

「はぁ……、でもそんなことは普段の授業とかホームルームでも行っているんじゃないですか」

担任の先生なんかは、ホームルームの時間などにいろいろ”勉強”に関する事について生徒に語りかけてくる。
例えば「今勉強しなければ一生後悔する」「最近の学生達はろくに勉強をしなくて、全く持って嘆かわしい」
「勉強とは、本来……」等といった具合に。そういえば、前のＨＲでうちの担任が３０分間くらいずっと「何処の大学にいくかで人生は大きく変わる」みたいなことを喋っていたな。俺は半分寝ながら聞き流していたが。

「では聞くが、桂馬君。君はその先生達のいうことについてちゃんと耳を傾けたことはあるか？」
「いや、ないですが……」
「まぁ、そうだろうな。先生達のいうことは、自分の理想論を生徒達に押しつけるような感じで話すし、また”最近の生徒達は……”といった感じで生徒達をどこか見下した感じだからな。全員が全員というわけではないが、そういう論調で話す先生が非常に多い」
「あ、それ分かります」

と割り込んできたのは町中。

「先生達のあの生徒達を見下しているような話し方で話されたら、余計に反感を持って勉強の意欲もなくなってしまうのですよ」

あぁ、確かにそれは経験がある。中学の頃だったか、テスト返却時に「あなた達、こんな簡単なテストなのに平均点が６０いかないってどういうこと！？」

みたいなことをいわれたとき、俺も含めてクラスメイト達はみんないらついていたな。あれでしばらく

その先生の授業の授業態度が悪くなって結果的に担当の先生が途中で替わったりもしたっけ。

「まぁ、そういうことだ。ただでさえうちは進学校で常に勉強に対してストレスを感じているのに、さらに先生から

愚痴聞かされて真面目に聞くような奴は少ないだろう。しかし、しかしだ！」

田中先輩は、だん！と一度両手で机を叩く。

「勉強は本来素晴らしい行為なのだ！勉強は受験勉強のためだけにあるものではない！

自分の未来を豊かにするための一番重要でそして唯一の行動なのだ！

だから私は勉強がいかに重要で素晴らしい行為であるのかということを

一人でも多くの人に伝えるためにこのサークルを作ったのだ！」

俺は開いた口が塞がらなかった。発言の内容でなく、田中先輩がこんな熱意あるしゃべり方をする人だとは思わなかったからだ。

彼女は俺のそんな様子をみて、さすがに自分があまりに興奮してい

たことに気付いたようだ。
そして、こほん、と軽く一息つけて再び喋り始める。

「まぁ、とはいってもそんな堅苦しいものではない。基本的に毎週何日来なければならないというようなことはない。
基本的に好きなときに来ればいい。それに、テスト勉強で困ったことが在ればいつでも来るがいい。私達が解決してやる。
まぁ、後は勉強に関して何か思うことが在ればいつでもいっていい。互いに議論し合おうではないか」

そこまで聞いた俺は、ここに入っても問題はないなと思った。
今まで勉強は自分の見栄を守るためだけのものだと思っていた。でも先輩の主張を聞き
もう少し勉強について考え直さないと行けないと思った。もちろん、まだ勉強に関して分からないことはたくさんある。
でも、そんなときはここに来て先輩達に相談すればいいのだ。

「まぁ、こういった感じだ。さっき行ったとおり何時来るも来ないのも君の自由だ。まぁよろしく頼むよ」
「ええ、これからよろしくお願いします」

そうして、後は入部書に名前を書いて田中先輩に提出した。
これで今日から正式に、勉強部の一員となったのだ。
これから、このサークルでどんなことを学んでいくのか
そう考えるとなぜだか分からないけど、期待を抱けるようなそんな気分にさせてくれるのだった――

2―5．帰り道

初日の部活を終えた俺は、部室を後にする。
下駄箱で靴に履き替え、校門を出たところで、後ろから林道に呼び止められる。

「待ってー、一緒に帰ろうよ」
「あぁ、別に構わないけど。そういえば家はどの辺」
「んっとね、中央字駅からバスで２０分くらい行ったところだよ」
「そうか、じゃあだとすると駅まで一緒だな」

時刻はもう午後5時をすぎており、空が淡いオレンジ色に染まっている。
その空の下、俺と林道は二人並んで帰宅する。

「でもよかったよ」
「よかったって、何が？」
「君が入部してくれて」

え……それってどういうことだ、もしかして……。

「君が入部してくれなかったら、私達のサークルはサークルとしても活動できなくなるところだったんだからね」
「……そうなんだ」
「うん、去年二人いた3年生の部員はもう卒業しちゃって部員が足らなくなっていたんだよ。
それで5月までに部員がはいらなかったらそのまま廃部するところだったんだ」

うちの学校では、最低5人以上の部員がいなければサークルとは認められず
部室は与えられない。ちなみに部員が１０人以上になると部活に昇格し、よりよい部室が
割り当てられるらしい。
俺はちょっとがっかりしたような気分になった。

「あれ、でも部活って部長……田中先輩が作ったんじゃなかったけ？」

確かそんなことを言っていた気がする。

「うん、作ったのは彼女だよ。でも、そんな物珍しいサークルに興味を持ってくれたのか、発足時に
当時3年生だった二人が協力してくれたの。その二人はほとんど毎日勉強部に来て、受験勉強をやってたらしいよ」
「確かに、物珍しいと言えば物珍しいよな」

ただ、受験生にとっては役に立つ部活動なのかもしれない。実際に活動しているところを
みていないからなんともいえないけれど。

「そういえば、林道さんって、どうしてあの勉強部に入ったんだ？やっぱり勉強が好きだからか？」
「あはは違うよ、もし好きなら君との勝負に負けるわけないよー」

確かに、勉強が好きであればあんな点数を取ってしまわないんだろう。

「わたしはね、部長に誘われたんだ」
「そうなんだ」
「わたし、去年ねちょっと落ち込んでいたの。……学校が楽しくなくて、何のために私はこの学校に来ているんだろうって。もう学校なんてやめちゃおうとも思っていた。」

そういう彼女は空の方をぼうっと眺めていて、昔を思い返しているようだった。
その表情にはどこか陰りが感じられた。

「そんなとき先輩が突然私に話しかけてきたの。あれは確か屋上だったかな。
私はあの頃……いつも、一人で屋上にいたから。そして、そんな私を勉強部へ誘ってくれたの」
「……へぇ」
「あのとき、私はとても嬉しかった。どんな理由であれ、私を必要としてくれる人がいるんだなって。
だから私は勉強部に入部したの」
「なるほどね……じゃあ部長に感謝しなきゃね」
「そうね、私は今とっても感謝してるよ」

そういいながら、林道は微笑んだ。
彼女にもいろいろあったんだろうな。
そういえば、彼女はどうして俺を誘ったんだろう。
聞いてみようとすると、彼女は突然こっちを振り向いた。

「あ、そういえば」

彼女は携帯を取り出し、

「桂馬君、まだ互いの連絡先知らなかったよね。教えてっ」

「あ、あぁいいよ」

俺も携帯電話を取り出し、赤外線通信で互いの連絡先を交換する。

「えへへ、ありがとう。暇なときメールするね」

「あぁ……いいよ」

そして、俺と彼女はとりとめのない話をしながら通学路を歩いていった。

１０分ぐらいしたところで駅に着く。

「じゃあ私、バスだからこの辺で。また明日ねー」

「……おぅ」

そして彼女は軽い足取りでバス停の方へ走っていく。

彼女が走り去るのを見届けると、俺は携帯電話を開き新しく増えた連絡先をみる。

そういえば、高校生に入って初めて連絡交換したな。

「林道　楓、か……」

これから、何か起こりそうな予感がする。

何が起こるかはまだ分からないけれど、それはきっと悪いことではないと思う。

俺は携帯を閉じ、駅へと向かった。

【第三章】３－１．メイド喫茶

中央字駅のすぐ近くにある、この町唯一のメイド喫茶『ニャンニャン亭』。
オタクブーム当初の頃は、もっとたくさんのメイド喫茶が存在していたのだが
ブームも冷めてしまい今では『ニャンニャン亭』一件だけしか残っていない。
何故今まで生き残っているのか。
まず、それは媚びすぎていなく、店が綺麗に保たれている。
さらに、かつて有名だったコックが料理を作っており、出される料理はどれも美味であり
味にこだわる客ですら好んで来るぐらいだ。
そして極めつけが、バイトの子がどの子も可愛い。何でも非公式のファンクラブまで存在しているらしい。

そんな『ニャンニャン亭』で、町中早（まちなか）　百合（さゆり）はバイトをしている。
彼女はメイド服をして、頭にはカチューシャを着けている。
ちなみに早百合は、当然ながらフロア担当だ。

「お帰りなさい、ご主人様！」
「お飲み物はなんに致しましょう、ご主人様」
「サユちゃーん、ご奉仕スペシャルセット１つ！」
「はいー、少々お待ちくださいませご主人様ー」
今日は、休日だからか客が多い。

客はおたくはもちろん、普通のカップルなどや一般客などもそこそこにいた。

（今日は特に忙しいなぁ）

何度も料理を運ぶためにフロアとキッチンを行き来している早百合はそう思った。

「サユちゃんは、本当に可愛いなぁっ」

「ロリ最高！」

「もうっ、私はロリじゃないです！れっきとした高校1年生ですっ！」

客達が、あははっと笑う。別に軽蔑した笑いではなく、彼女のその反応が可愛らしいのだ。

周りからも「サユちゃん、萌えー」みたいな歓声が聞こえてくる。

まだバイトを初めてから1ヶ月しか経ってないというのに、早百合は喫茶店でとても人気のある存在となっている。

一方、カフェの隅の席で暗いサングラスと季節はずれのコートを着ていた男がいた。

男はずっと、早百合の様子を覗っていた。

早百合が客に食事を運んでいる途中、その男と一瞬目があった。

すると男は、手に持っていた新聞を開きそちらの方に目を向けた。

（あのお客さん、最近よく来るなぁ）

最初に見かけたのは二週間前。それ以降毎日そのコートを着た男はほぼ毎日来店していて

いつも端の席に座っている。

（きっとこの店の料理が好きなんだろうな。っと、そんなこと考えてる場合じゃないや。仕事に集中しないと！）

そう思いながら早百合は、仕事へと戻る。

夜の１１時頃、閉店の時間。客はすでに誰もいなくなり残ってるスタッフが後片付けをしていた。

早百合は、フロアの椅子を配置し直していた。

（ふぅー、今日も疲れた。そういえば給料日って今日だっけ。）

そんなことを思っていたら店長から呼び出された。

「はい、早百合ちゃん。今月の給料」

「ありがとうございますっ」

店長から封筒を貰うと、すぐに封を開けて給与明細表を手に取る。

そこには高校生が貰うには多すぎるぐらいの金額がそこに書かれていた。

（わぁっ、初めての給料っ）

早百合は、ぱぁっと顔を綻ばせた。

そんな様子を見ていた店長は、彼女とは対照的に何処か心配そうな顔をして

早百合に話しかける。

「ところで早百合ちゃん」

「なんですか、店長」

「先月入ったばかりなのに、ずっと来てただったけど大丈夫？学校もあるしあまり無茶しないほうがいいよ」

早百合は、内心動揺しつつも受け答える。

「大丈夫ですよ店長、それに今一手不足ですし、私がいないと困るでしょ？」

「それはそうなんだが……うーんしかしなぁ……」

先月バイトをしていた子が3人もやめてしまった。店側もバイト募集をしているが

なかなか基準を満たす子が入らないのが現状だった。その分早百合のバイトの出勤数は自然と多くなり

先月は３０日のうち２７日はバイトをしていた。

「私も本当にきつくなったらちゃんと休みますし、まだまだ若いから平気ですよっ」

「そうか、そこまでいうのなら……分かったまだしばらくは忙しいだろうけどよろしくお願いするよ」

「はいっ！じゃあ今日はこれで失礼します！」

店から出ると、早百合はふらりとよろめく。

（やっぱり、少し頑張りすぎたかなぁ……ううん、これくらいでへこたれちゃ駄目！

私は絶対自分の夢を叶えるんだから……！）

そう自分を叱咤しつつ、早百合は家路を急ぐのであった……。

3－2．通学路にて

朝、時刻は６時４５分。枕元に置いてある携帯電話から大音量のベルが鳴り響く。
俺は携帯を手に取り、アラームを止めけだるい体をゆっくりと起こす。

「うーん……もう、朝か」

起きあがり、制服を着て洗面所で顔を洗いリビングへと向かう。
妹と母さんはすでに起きていていた。

台所にはすでに、朝食が並べられていた。
妹はすでに朝食を食べ終わった後らしく、弁当にご飯やおかずを詰めている。
母さんは衣類のアイロン掛けをしていた。

「今日の朝ご飯は、ベーコンエッグとみそ汁に白ご飯か」

ちなみに、朝食はいつも妹が作っている。
妹は料理が好きで、自分や俺の分の弁当も作ってくれるし、休日なんかは
夕食まで作ってくれる。しかも、妹の料理は本当においしいのだ。

「お兄ちゃん、今日の弁当よ」
「ありがとう、いつも助かるよ」
「ん、じゃあ私部活があるから、先に行くよ。お兄ちゃんも遅れないようにね」
「あぁ、いってらっしゃい」

妹は中学3年生、彼女は水泳部であり最後の大会に向けて、毎日朝早くから夜遅くまで部活漬けだ。
それなのに早朝に起きて、俺の分の飯も作ってくれるとは良くできた妹だと思う。

じゃあ、俺も早速学校へ行きますか。

電車を降りて、学校へ向けて歩いているとどこかでみかけたような生徒が前を歩いていた。
（あれは……確か勉強部の町中　早百合だっけ？）
声を掛けようか迷っていたとき、彼女に違和感を感じた。

彼女、気のせいかふらふらしていないか？
歩きもとてもゆっくりで、右へ左へとふらふらしている。大丈夫なのだろうか。

そう思った矢先、彼女は前向きに倒れている。
学校に向かっている他の通学生達が騒ぎ始める。

くそっ。

俺は、人だかりをくぐり抜け彼女の方へと向かう。
彼女の顔を見ると、疲れ切った顔をしていて目にはくまができていた。
いてもたってもいられなくなった俺は、彼女を背中に背負いダッシュで学校へ向かう。

学校へ着き、校内に入る。
そして向かうは保健室。

保健室の扉を開けるとそこには保険医の先生がいた。

「先生、こいつ通学中に倒れちゃったんです！」
「それは大変、早くベッドに寝かさないと」

俺はベッドに彼女を下ろす。

「後は、私が彼女の面倒をみるわ。連れてきてくれてありがとう」
「彼女……大丈夫なんですか？」
「大丈夫よ……ただ、みたところちょっと疲れているみたいね。あと寝不足ね。きっとなにかしら
無理をしすぎて、体が耐えられなくなったんだと思う」
「そう、なんですか……」

まだ入学してからまだ一ヶ月の彼女が疲れ果てているなんて。
彼女は大丈夫なのだろうか。

俺は彼女のことが気になりつつも、教室へと戻った。

教室。時刻は8時５０分。ＨＲの開始は9時００分で、まだ１０分間の猶予がある。
この時間になるとすでに生徒達はすでにほとんど登校してきていて、昨日の宿題をしたり

友人同士昨日のテレビ番組について話したりしている。
席に座り、今朝合った出来事について考える。
町中早百合は大丈夫なのだろうか。
そんなことを思案をしていると、林道さんが話しかけてきた。

「おはよう桂馬君」
「おはよう」
「ところで、私桂馬君が、誰かを背負って保健室の方へ向かって走っていったのを見かけたんだけどいったいどうしたの」
「みてたのか、実はな……」

俺は、彼女に朝のいきさつを話した。
朝彼女に出会い、そして突然倒れたこと。

「へぇ、そうだったんだ。そういえば彼女部活になかなか顔出さないし、昨日もちょっと疲れている様子だった」
「昨日もか、それは気付かなかった」
「うん、なんかとても眠そうにしていた……なんかあったのかなぁ、ちょっと心配だよね」
「まぁ、そうだな」

まだまともに話したことはないにしろ、彼女も数少ない部員の一人である。
気にならないわけがないだろう。

「じゃあ、部活に来たとき彼女にいろいろ聞いてみよっ」
「あまり好奇心で聞くものじゃないぞ、彼女にだって話したくないことの一つや二つあるだろうしな」

「失礼なっ、私は彼女のことを純粋に心配しているんだよっ」
だといいけど。まあ林道さんが嘘をつくとは思わないし、本当に純粋に町中早百合を心配しているのだろう。

「ところで、桂馬君。」
「ん？」
「今日は部活出るのかな？」
「そうだなぁ、……特に他に用が有るわけでもないし行くよ」
「じゃあ、放課後一緒に行きましょう」
「ああ、いいよ」

ま、勉強部が具体的にどんなことをやっているのか知りたいしな。
そしてチャイムが鳴る。朝のＨＲの時間だ。
今日も一日頑張りますか。

3－3．初活動　－町中小百合の悩み　前編－

授業が終わり、放課後。
俺と林道は一緒に勉強部のとびらを開く。
そこにいたのは、部長の田中（たなか）　唯（ゆい）そして……

「あれ、さゆりちゃん？」
「あ、桂馬先輩、林道先輩、こんにちはです」
町中（まちなか）　早百合（さゆり）がそこにいた。

「ああ、おまえらか。早速今日から来るとはなかなかやる気だな」
まあ、特にやることもなかったから来たんだけどな。
席に座ると、向かい側に座っている町中早百合が話しかけてきた。

「桂馬先輩、今日はありがとうございました。保健室まで連れて行ってくれたそうで」
「いや、気にすることないよ。それよりもう大丈夫なの？」
「えぇ、午後まで保健室で休んでましたから」
「でも倒れた日に、無理に部活に来る必要はないんだぞ？」
「いえ、私桂馬先輩に一言お礼がいいたくて……それで、勉強部に来たら桂馬先輩がいるかなと思って。来て正解でした」

律儀な子だな。俺はそう思った。
田中先輩が会話に入ってくる。

「それにしても、倒れるなんて一体何があったんだ？」
田中先輩が林道に問いかける。
「え、えぇっと……ちょっと最近寝不足で」
町中（まちなか）　早百合（さゆり）は狼狽しながらも答えた。
「ふむ、それはいかんな。寝不足は勉強の敵だぞ。四当五落なんて言葉があるが
私に言わせればそんなのは戯言（ざれごと）だ」
「四当五落ってなんですか、先輩」
「四当五落は受験用語の一つでな、１日４時間だけ寝れば合格すれば合格して、５時間寝れば
落ちるという意味だ。つまり、眠る時間を犠牲にして勉強しないと受験には落ちるという訳だ」
「へぇ……それは初めて知りました。確かにレベルの高い大学に行こうと思ったら、睡眠時間を削ってでも勉強しないと受かりそうにないですからね」
「お前はそう思うのか、だが私はそう思わない」
「なんでです？」
「頭に悪いからだ。人間の脳は一日中働き続ける。
起きている間は、五感が受ける刺激を処理し続けなければならない。
もちろん、処理した内容を整理する暇もない。
じゃあ、その内容を整理するのはいつか？寝ているときだ。
睡眠が長ければ長いほど、起きてる間受けた情報が整理され
逆に睡眠時間が短ければ短いほど情報は整理されず、ごちゃごちゃな状態になるわけだ」

……確かに、俺も中学生の頃、期末や中間テストの時期になるといつも、徹夜で覚えていたっけ。
その徹夜で確かに点数は高得点取れるんだが、徹夜したときに覚えたはずの内容はテストが終わるとすぐ忘れてしまう。

俺がそのことを話すと、先輩は

「残念だがそれは別問題だな、睡眠とはほとんど関係ない。それに徹夜で乗り切るのはもっとも愚かな話だ。
徹夜でテストを乗り切れるのは、テスト範囲が狭いからだ。だから徹夜でもなんとか凌ぐことができるのだ。まぁ、今はそのことはおいておいて……」

仕切り直し。先輩は腕を組み話し続ける。

「もうひとつ、徹夜して勉強することが駄目な理由としてもうひとつある。そしてそれは、早百合お前にはよく分かっているはずだ。しかしお前はそれを自覚していない」
「えっ……私がですが」
「あぁ、なんだと思う？」
「えっと……」

徹夜が駄目な理由。何だろうか？

「付け加えるならば、それは徹夜に限ったことではない。例えば、夏休みの宿題を最後の暇でやらずに最終日に一気に片付けた日、お前はどう思う？　楽しいと感じるか？」
「いえ……正直、苦しいとしか思えません」
「だろうな、そしてその”苦しい”と思うことが問題なのだ」

”苦しい”と思うことが問題……。
分からない、何が問題なのか分からない。
俺は苦渋な顔をしながら唸っている。他のメンバーもそれが何が問題なのか分からないといった顔をしていた。
……齋藤先輩を除いては。

そして、その齋藤先輩が口を開く。

「つまり、田中が言いたいのはこういうことだろう。
”苦しい”と思うことで、その行為を”やりたくない”と思ってしまう。
……つまり勉強することを嫌いになるということ。
そして嫌いだと思う事を積極的にやりたいと思うか？　ならないだろう。つまりはそういうことだ」

なるほど。言われればそれは当然のことだ。誰も”苦しい”とか”辛い”とか思うことを積極的にやりたいとは思わない。

町中さんは、しばらく何かを真剣に考えていた。
しかし、途中で何かに気付いたかのように、はっと驚いたような顔をした。

そして彼女は、それが合っていることを確認するかのように、田中先輩に向かって言った。

「つまり、先輩の言いたいことは、”徹夜して勉強する”行為をすることは、”自ら勉強を嫌いになる”ことと同じと言いたいんですね」

すると田中先輩は、ようやくそれに気付いたかとでも思っているよ

うな、どこかほっとした顔をしながら答える。

「あぁ、その通りだよ」

すると、町中さんは

「だったら教えてください……徹夜せずに、夜遅くまで勉強しなくていい方法を……！」

そう、田中先輩に懇願した。

３－３．初活動　－町中小百合の悩み　前編－（後書き）

前回からかなり間が空いてしまいました……すみません。

３－４．町中早百合の日常

深夜２３時。町中早百合は帰宅した。
彼女のアパートは駅から自転車で２０分の距離にある、郊外の小さなアパートである。
彼女はビルの２階の部屋の前に立ち、ドアを開け、「ただいま」という。
しかし「おかえり」の返事はない。妹も母ももうすでに寝ている時間だからだ。

リビングに着くと、テーブルの上にはいくつかの料理が用意されていた。
それは母親が用意してくれた晩ご飯だった。

彼女はそれらの食事をレンジで温める。
温めるのを待つ間、彼女は冷蔵庫からポットを取り、コップにお茶を入れそれを一気に飲み干す。

そして「はー……」と長い溜息。
もう早くベッドに入ってゆっくり休みたい。ぐっすりと眠りたい。
でもそれは、まだ無理。

レンジがチンという音をならす。
彼女は、温められた料理をテーブルに置き、食事を始めた。

たった一人で食べる、晩ご飯。バイトに入って一ヶ月、ほぼ毎日が晩ご飯を一人で食べていた。
最初は寂しさを覚えていたものだが、いつしかそんな感情もなくしてしまった。

食事後、彼女は食器を台所へと運びそして食器を洗い乾燥機の中へと入れる。
そして、お風呂に入った後パジャマに着替え自分の部屋へ。

彼女の部屋は、広さは約六畳で、タンスと本棚、机が二つに二段ベッドが配置されている。
そして二段ベッドには彼女の妹、町中（まちなか）　香（かおり）がすやすやと、吐息をたてながら眠っていた。

早百合と香は、二人で同じ部屋を使っている。他に部屋がないからだ。

彼女はベッドには行かずに自分の机へと向かう。
そして、鞄から教科書とノート、そしてメモ帳を取り出す。

「さてと、今日の宿題はなんでしょう」

そう独り言をぼやきながら、彼女はそのメモ帳を取り出す。
そこには、授業中に出された課題一覧が書いてあった。

詳細は以下の通りである。

２０１０年＊月＊＊日
１．国語（古文）：４５～５０Ｐ　本文翻訳　期限：＊月＊＊日
２．英語：３５～４０Ｐ　本文翻訳　期限：＊月＊＊日　※明日単語テスト（有
３．数学Ａ：Ｐ３５　問６－１，　６－２，　６－３
４．世界史　・・・

時刻はもうすぐ0時を迎える。
しかし、彼女はまだ宿題を全くと言うほど終えていない。

「はぁ……また徹夜かぁ」
バイトに入ってから1ヶ月、休日以外早百合はほとんど睡眠の時間が取れていなかった。
いつも夜遅くまでバイト、そして休む間もなく学校の宿題、そして授業の予習……
それが彼女の日課。

もちろん、そんな無理な日々が続くと疲れが溜まる。
実際、彼女はここ最近授業に集中できなくて、途中うとうとと眠ってしまい先生に叱られることが多くなってくるのだ。その上、授業内容に頭が追いつかなくなり、結果宿題を解くのに時間が掛かってしまう。

そんな悪循環が、彼女の体と精神を苛んだ。

そんな、無理な生活が進んでも彼女はバイトの時間を減らしたりしようとは思わなかった。

（駄目よ、私。バイトを減らしたりなんかしたら給料が少なくなっちゃう。そしたら私は将来大学に行くことができなくなる）

早百合の家庭はとても裕福と呼べるものではなかった。
まず、彼女には父親はいない。2年前に父親と母親は離婚してしまった。それは突然なことだった。
離婚の理由は彼女は知らない。彼女の母もいくらきいても教えてはくれなったからだ。
彼女の父親は、会社でもかなり重役の立場だったので、そこそこ給

料がよかったため、離婚する前は都内の一軒家に住んでいたのだ。
もちろん、彼女と彼女の妹それぞれに、部屋も割り当てられていた。
しかし、離婚すれば当然元いた家に住むことは叶わなかった。
ちなみに、彼女の父親が子供を引き取ることはなかった。そのことについても両親は何も教えてくれることはなかった。

だから離婚してから、彼女達家族は、郊外の小さなアパートに部屋を借りてそこで暮らした。
母はパートを始めた。しかし、母は今まで専業主婦だったためなかなか仕事が上手くいってないらしく常にぐったりとした様子だった。
そんな母を見て、少しでも母の手助けをしたいと思うようになった。
そして、今のメイド喫茶でバイトをすることにしたのだ。

（私は、母の負担を少しでも減らしたい。それは私が大人になってからもずっと。だから、私はいい大学に入って、給料の高い就職先に就く。
そのためにも、バイトと勉強どっちも疎かにすることは出来ないんだ……！）

彼女は、教科書とノートを開き右手にシャーペンを握る。
そして宿題に取りかかるのだ。

「さて、最初は古文よ！」

その後、宿題が全て終わった頃には、窓の外から太陽の光が部屋を照らすのだった……。

３－５．初活動　－町中小百合の悩み　中編－

町中さんは田中先輩のことを見据えていた。
俺達はどことなく居心地の悪さを感じながら、二人の会話の行く末を見守る。

「ところで、町中。君は？日、中央字駅前のあるところでバイトをしているそうだな」
「えっ、なんで知っているんですか！？」
「まっ、ある筋からな。そしてそんなことは今はどうでもいいことだ」
「あ、あの、先生には……」

彼女は困った様子で田中先輩を見ながら怖ず怖ずと話す。
町中さんは明らかに狼狽していた。

「言わないよ。君は？日ここに来てくれている大事な部員だからな。まっ、いつも３０分くらいしか
いてくれないが、ここにはいつ来るのも出るのも自由だしな」
「あ、ありがとうございます……」

町中さん、？日来ているのか。

「で、だ。これもある伝から聞いた話だが、君はほとんど毎日バイト先へいっているそうだな。しかも閉店時間まで」
「ど、どうしてそこまでっ！　私若干怖くなってきたんですがっ！」
確かになぁ……その伝というのは実は彼女のストーカーじゃないか。
そう考えると彼女が怖がるのもわかる。

「まっ、何故知っているのかっというのかは今はおいといて、だ」
「おいとくんですか……」
「安心しろ、そのつてとなる人物は信用できる人物だからな」
「そうなんですか、先輩がいうのなら……」
いいんだ……。まぁ先輩が大丈夫だというのなら大丈夫なのだろうが……。
「話を戻すが、君がほとんど？日バイトを閉店時間までやっているというのは本当なんだな」
「……本当です」
「なら、話は早い。君はバイトを辞めるべきだ」
「駄目です、そんなの！」
彼女は声を張り上げて叫ぶように言った。
「何故、ダメなんだ？」
「それは……私の家が貧しいからです」
町中さんは、俯きながらも暗い表情で語った。
彼女にはまだ小学生の妹がいること。
彼女の両親が離婚してしまっていること。
彼女の母親も？日慣れない仕事で疲れ果てていること。
「……私は母さんと妹をできるだけ楽させてあげたいんです。
だから私はいい大学を出て良い就職先に就くんです。それには……
少しでも多くのお金が必要なんです」
「つまり君は、今の生活費を稼ぎつつ、かつ、学費や大学に通うた

めの費用を自分で稼ごうとしている。さらにその上
いい大学へ行くために勉強を無理して続けていると」
「……はい」

いや、明らかに無理をし過ぎだろう。
彼女は、自分の目標のために過剰な努力をしていた。そしてその無理が重なって今朝のような事態になった……。

「なるほど……なら尚更、君はバイトを辞めるべきだな。辞めないにしても休日だけにした方がいい。君は無茶をしすぎだ」
「でも……」
「君はいい大学へ行きたいんだろう？　今のままだとそれは絶対に無理だ。それは薄々君も感じていることではないか」
「それは……そうですが、でも……」

明らかに図星だったんだろう。彼女はより一層暗い表情になる。

「それでも、お金のためにバイトを辞めるわけにはいけない、そう言いたいのだろう」
「……」
「だったら、手はある」
「えっ」

町中さんは顔を上げ、驚いたように田中先輩の方を見つめた。

3－6．初活動　－町中小百合の悩み　後編－

帰り道。
「奨学金かぁ……」
結局先輩から進められたのは奨学金の話だった。
奨学金にも幾つか種類があるらしい。
一つは返却時に利息を支払わなければならない奨学金。これはほとんど誰でも受けられるらしい。
もう一つは利息を払わなくてもいい奨学金。利息を払わなくてもいいだけあって条件は厳しくなる。面接と学業の成績両方の結果で受けられるかどうか判断されるらしい。
そして最後。返却しなくても良い奨学金。これも条件は厳しい。成績がいいのは前提条件として挙げられ、仮に成績が落ちたり問題ごとを起こした場合それらはすべてすぐに取り消しになってしまう。
私は部室での会話を反芻してみる。
「でも奨学金って結局借金なんでしょう……なんか抵抗があって」
「まぁ気持ちは分からんでもないが、しかし仮にこのままバイトを今まで通り続けていったとしよう。それで受験のための勉強がまともにできると思っているのか？」
「それは……でも、返せるか不安で……」
「そう心配することもない、一月毎の返済額は少ないし幾つかの延滞措置もないでもない。それにだ」
「はい……」
「お金のことは高校生が何とかしようと思っちゃいけない。学校とは勉強が本分だ
。だからそういういことは周りの力に頼った方がいいんだ。返済なんていつでもできる」

「……」
「まぁ、確かに奨学金を遊びのために使い、果てには返却義務を怠るようなどうしようもない奴らもいないでもない。でも君はそうじゃないだろう」
「それは……そうです。そんな他のことに使うなんてあり得ないです。それに借りたものは必ず返します」
「その意思があれば大丈夫だ、まぁ最終的にどうするかは君次第だけれども」
「そうですね、少し考えてみます。えっと、ありがとうございます」
バイトばっかりで、勉強ができなくて結果大学に行けなくなる……。誰かに言葉にされると、その言葉がぐさりときた。薄々は感じていたのだ。
このままバイトを続けていて本当に大学に行けるのかと。
でも、借金をするのは嫌だった。全部自分が死ぬ気で勉強とバイトを続けていればなんとかなると思ってこれまでやってきた。
……今回の出来事でそれはだめだって分かった。学業とバイトと勉強全てを両立するのは不可能だって。
「……はぁ」
ため息をつきながら、私は自分の家の鍵を開ける。
そこには、いつもはこの時間いつも仕事のはずの母さんが、テーブル越しに座っていた。
「……ただいま。今日は仕事は？」
「そんなことはどうでもいいの。それより小百合、今日あなた通学中に倒れたそうね」
「……ど、どうしてそのことを知っているの」
「あなたの担任の先生から電話が掛かってきてね。あなたが倒れた

って」
「そうなんだ」

「小百合」
「はい……」
「ごめんなさい」

母は私に向かって頭を下げた。
「なっ、なんで母さんが謝るの？　母さんは何も悪くないじゃない」
「私がつまらないことで父さんと別れたりしちゃったから！　私がまともに仕事ができないから！　あなたを辛い目に合わせてしまってっ……！」
「母さん……」
「小百合が毎夜遅くまでバイトして、その上勉強までしてっ。そんなことを
させているのは全部自分のせいっ！」
「……」
「お願いだから、もう無理しないで！　代わりに母さんもっと頑張るから！
だから……っ！」
母さんは目から涙を流していた。
そんな母の姿を見て私はなんてバカだったんだろうと思った。

自分が無理をしたせいで、それで多くの人が心配させてしまっている。
勉強部のみんなや母さん……。
自分の無茶な行動が周りを心配させてしまっていた。

「母さん、私バイト少なくするつもりなの。だから心配しないで。代わりにね、

奨学金をもらおうと思うんだ」
「奨学金……でもあれは借金なんでしょう……返却できるかどうか……」
「もちろん受け取ったお金は必ず私が全部払う。
大丈夫、ちゃんと働いていれば返却はそんなに大変じゃないし。
母さんや妹にも一切負担は掛けない。だから私が奨学金を受けることを許して」

暫くの沈黙の後母は口を開いた。
「……分かったわ。あなたがそういうのなら、私が反対する理由なんてどこにもないもの」
「ありがとう！　私頑張るから！」
「……あまり頑張りすぎて、今日みたいな事にならないで。私は頼りない母親だけれども
それでもあなたの母親なのだから。辛いことがあったらいつでも言いなさい」
「母さん……ありがとう。もう、母さんを不安になんかさせないよ。約束する」

もう自分の無理な行動で、母を心配させたりしない。
自分の頑張れる範囲で精一杯頑張っていこう。私はそう誓いを新たにするのであった。

【第４章】４－１．どうやって勉強すればいいのか…

家の自室で、自分は珍しく机に向かい勉強をしている。
「……」
しかし……
「全く分からん！　同じクラスの奴らはよくこんなの分かるよな……」
ため息をひとつつき、勉強前に用意していたコーヒーをぐいっと一気飲みする。
「そもそも今、自分はどうして勉強しているんだろう」

勉強の意味。何故僕は勉強がしたいと思った。
町中さんが、奨学金を申し込んでまで勉強する理由。それはよりレベルの高い大学に入って
より良い就職先に就くためだと分かってから、自分は考えるようになった。
じゃあ自分がここにいる理由って何だろう。……分かっている、本当は理由なんて存在しないって事。
見栄を張るためだけにこの高校を受けただけ。見栄が張れなくなってしまった今では、ここにいる理由もない。
それは今も変わらない。
でも林道さんと出会い、勉強部に入って町中さんの事情を知り、もう一度勉強というものに向かい合おうと思い
今こうして机に向かって勉強をしようとしている。しかし……
「やっぱり一年間のブランクは大きすぎる……なにから初めていいのか全然分からない……」
中間テストまであと三週間。自分はこのまま去年のように最下位の方に居続けるのか……それとも……。

「とにかく今日はもう無理だ。テレビでも見よう」
結局この日の勉強時間はたったの十分だけで、後の時間はテレビを見る時間だけに費やされた。

翌日。いつも通りに起き、いつも通りに通学し、いつも通りに教室に入る。
「あ、桂馬君おはようー」
「おはよう林道さん」
「今日の分の課題ってもうやった？」
「いや、やろうと思ったんだけど全然分からなくてさ……」
「あはは、実は私も……うーん、このままだとやっぱ厳しいね。このままだと二人して中間テストで最下位を彷徨うことになりそうだよ」
「まぁ、去年はずっと最下位の方だったからいまさらって感じもしないでもないけど、でも……」
「でも？」
「……今回はもう少し頑張ってみたいなって」
この気持ちは本当だった。町中さんみたいに勉強に対して真面目に取り組もうとする姿勢をみて
自分ももう一度頑張ってみようかなと思うようになった。
「うん、私も同じだよ。一緒に頑張ろう！」
「……あぁ。頑張ろう」
「とはいっても、このままだと前と同じ結果になってしまう」
これまで一年間まともに勉強していなかったのだ。このブランクを埋めるには相当大変だと感じずにはいられなかった。
どうしたものかと、腕を組んで考えていると林道さんが自分にくすくすと笑い
「やだなぁ、私達は勉強部なんだよ。先輩達に聞けばきっといい解決方法が見つかるよ！」
と断言した。

「確かに田中先輩なら、今の現状を打破してくれる方法を知っているかもしれない……」
なにせ勉強部の部長だ。噂によると、早朝から、昼休み、放課後授業の時間以外常に部室にいて勉強をしているらしい。
そんな勉強狂な部長のことだ。きっといい勉強法とかを教えてくれるに違いない！

「そうだね、じゃあ今日放課後部室にいこうか」
「うん！」

予鈴のチャイムが鳴り、担任の先生が教室に入ってくる。
「ほら、皆席に着け。ホームルームを始めるぞー」

こうして、今日も一日がはじまる――。

4－2．　君達はどうしたい？

放課後になり、僕と林道さんは部室へと向かう。勉強部の扉を開けると、田中部長と斉藤先輩が既にいた。

「こんにちはー」

「林道に桂馬か。中々殊勝な心がけだ」

うんうんと一人頷く田中部長。思うんだけど、部長はやっぱりちょっと変わっていると思う。話し方も男勝りだし。

対するもう一人の先輩は、一瞬俺たちの方を向いたきりすぐ、目元の本に視線を戻す。

「桂馬君」

林道さんは僕の方を無言のまなざしで見つめてくる。早速相談しようというアイコンタクトのつもりだろう。

「あ、そうだね」

僕は早速部長達に、相談をすることにする。

「あの、部長」

「なんだ桂馬」

「えっと、勉強のことで相談があるんですけど……」

田中部長は意外な顔をした。

「ふむ……お前が勉強のことで相談か」

「え、えぇ……」

「いいだろう。とりあえず二人とも椅子に座れ。話はそれからだ」

「は、はい」

田中先輩に言われるがままに席に着く。

「それで、相談ってなんだ……」

「えっと、昨日中間テストに向けて勉強しようかなって思って実際やってみたんですけれど

どこから手を着けていいか分からなくて……」

「なるほど、ちなみに教科は何をしようとしていたんだ？」

「えっと、数学です」

「……ちなみにどこから勉強しはじめたのか？」

「中間テストの範囲のはじまりからですけれど」

それだけ聞くと、先輩は席から立ち上がり部屋の片隅にある本棚から一冊のファイルを取り出した。

「あの、部長。そのファイルは？」

「これはテスト順位表をまとめたものだ。これは去年の一年の分だ」

この学校ではテストの順位は全体的に公表される。だからそう言ったファイルがここにあるのは

ある意味当然のことだ。

「そういえば、どうして順位を公表するんですか？」

林道さんは思いついたように部長に質問する。

「そうだな……幾つか理由はあるが」

部長は、ファイルのページをパラパラと捲りながら話し始める。

「一つは、競争意識を芽生えさせること」

「競争意識、ですか？」

「あぁ、この学校は進学校だからな。ここに進学してくるものの九割以上が大学進学を希望している。
そして受験は、いわば戦争だ。点数が他者と比べて劣れば落とされ、上ならば生き残る。そのことを自覚させ
他者に負けないようにと意識付けさせるのが目的の一つだ」
「競争ですか……」

林道は、複雑な顔をしている。

「もう一つは、自分の学力が、自分の望む大学に受かるために必要な学力があるかどうかだ。
この学校では各順位毎に、どのレベルの大学に入ったかというのをまとめてあるんだ。この大学に入るには最低
何位にならないといけないといった目安となるわけだ」

競争意識を芽生えさせる。確かに、誰かに負けたくないという闘争心から自らを勉強に迎えさせる力を持っているかもしれない。

「でも、その競争に負け続けたら……却って自信をなくす原因にもなるような……」

林道さんはぼそっとつぶやいた。

「確かに自分の順位に失望し、自信をなくし勉強しなくなる奴もいる。
この順位公表はあまりに現実を視覚化しすぎているからな。事実、生徒の親たちからも『プライバシーの侵害だ！』とか、苦情も
多少はあるらしい」
「だったら何故、公表をやめないんですか……」
「最大の理由はさっきも言ったが闘争心を芽生えさせるためだろう

な。他者に負けたくないという気持ちが
勉強をするための大きな理由付けとなるからだ。……と、見つけたぞ。これはひどいな」
「ひどいってなにがです？」
「お前達の過去の成績だ。どれもほぼ最下位に近いじゃないか」
「……」

去年の記憶が蘇ってくる。順位表を見た時の失望感とそして諦観。
林道さんの方を見ると、彼女の顔は少し俯いていた。
田中部長は、ファイルを元に戻すと腕を組みながら林道さんと僕の方をじっと見つめそして言った。

「一つ聞きたい、君達二人はこれからどうしたいんだ？」
「どうしたい……というのは？」
「去年のような成績を残し、惨めな思いをするか。それとも去年の屈辱を払拭するか。君達はどちらの道を選ぶか。君達の意思が聞きたいんだ」

4－3．　無くなった理由、そして今どうするか

田中部長の問いに最初に答えたのは林道さんだった。

「私は……まだ、どうしたらいいか分からないんです」

「それは何故か？」

林道さんは一瞬言うのを躊躇うように見えたが、首を振りそして口を開く。

「……私は中学生の終わり頃まで母の言うことを聞いてきました。母のいいつけを律儀に守ってきました。そうすれば母は喜んでくれたからです。時にはご褒美においしい物を食べに行ったり、お小遣いをくれたりしました。母が嬉しそうにしていると私まで嬉しくなって、母の喜ぶことならなんでもしようと思っていました。でも……私が小学六年生位の時だったかな……」

母は会社をリストラされました。経営悪化によるリストラだそうです。リストラされた理由は二つ。一つは女性だから。もう一つは母は高卒だったから。それで真っ先にリストラ対象となったようです……。

リストラされてから母はまるで人が変わったようでした。私に沢山の習い事を強要させました。中学もみんなとは違う私立女子校に行きました。そのために小学校から塾通いをしていました。最初は私も母を喜ばせようと、勉強も習い事も一生懸命頑張りました。

でも、いくらいい結果を残しても母は喜んでくれませんでした。

テストで１００点をとっても、ピアノのコンクールで金賞を取っても……。
それでも、いつかきっと以前のように褒めてくれる日が来てくれる。
私は根拠なくそう信じて頑張ってきました。
でも、それが叶う日はとうとう来ませんでした。それどころが……
中学二年生の冬くらいの頃です。その頃は期末テストのシーズンでした。
私は風邪で体調が悪くて中々勉強に取りかかれなかったんです。その上テスト当日に、高熱を出してしまったんです。
そんな状態で、何とか試験は受けたんですけど結果は酷いものでした。
それでも事情を知っているはずの母は許してくれると思ったんです、ところが……。
母は、テストの結果を見て鬼が宿ったかのように豹変しました。そして私の頬を強く引っぱたいて怒鳴ったのです。

「なによ、この点数は。あなたこんな点数を取って！　今が一番大事な季節なのは分かっているじゃないの！　これじゃ今度の内心に響くじゃない！！　病気だったからって何！？　そんなのいいわけにもなりはしないわ！」

そのとき私は初めて、母に恐怖と失望の感情を抱くようになりました。
そして気付いたのです。私は母のために道化のように勉強していたのだと。そして母が満足できなければ
今みたいに叩かれ叱られる。
私はこれから先ずっと、母に叱られないために怯えながら勉強していくのだろうか？
そう思うと、とても嫌な気持ちになりました。
もう母のために勉強したくない、そう強く思うようになった私は母

が望んだ高校へ自ら堕ちることで
母を失望させ、私に興味をなくさせたのです。

「でも……今度は自分が何でここにいるのか分からなくなったんです……。今まで母のためだけに勉強してきた私は
これから何を目標にして勉強すればいいのか……だから、先輩に誘われたとき思ったんです。勉強部に入れば答えが見つかる
かもしれないって」

「……」
「さっきの質問に答えるなら、『分からない』というのが正直な答えです。でも、私は今回の中間テストで
自分が何のために勉強するのか。その意味を探したいと思っています」

林道さんはそんなことを思っていたんだ。母親のために勉強し続けた彼女。
でも母に失望し勉強する意味を失い再び勉強する意味を探そうとする意思。
それに比べて僕は……どうなんだろうか。

「そうか、林道の意思は分かった。桂馬はどうだ？」
「えっ、えっと……正直上手くは言えないですけど……」

僕は思いついた言葉をゆっくりと口に出す。

「僕は……中学の頃、優越感に浸るためだけに勉強をしてきました。
この高校を選んだのもこの学校に受かれば
みんな凄いと思ってくれる。本当にそれだけのために勉強をしていたんです」

「優越感に浸るためか。では、今はどうして勉強しなくなった？」

「それは……簡単に言うなら優越感に浸るような環境じゃなくなったというのが理由の一つです。みんな、自分と同じくらい……いや、自分より遙かに勉強ができる人ばかりで。ここでは、中学の頃みたいに優越感に浸れる場所じゃないと思ったんです。でも一番の理由は……」

僕が落ちぶれた一番の理由、それは。

「自分は優越感に浸るため以外に、勉強をする意味を見いだせなかったからなんです……」

4－4．　きっかけ1

自分が勉強に優越感を抱くようになったのは、小学生の頃。
その頃僕はいじめられっこだった。

「お前は本当に運動音痴だな」
「おいっ！　お前がみんなの足をひっぱってるんだぞ！　お前がもっと早ければ
一位になれたのに！」
僕は運動が苦手で、そのせいでクラスのみんなから馬鹿にされたりした。
小学校低学年の頃僕は病気がちで、良く体育の授業を休んだりしたせいだろう。
長く病院に通っていたおかげか小学校高学年からは、ほとんど病気で苦しくなることなく
他の友人達と変わらない学校生活を送ることができるはずだった。
でも、いくら体調が良くなったからって運動がすぐにできるわけでもない。
そのせいで、サッカーや野球ではみんなの足手まといとなってしまい同じチームになった他のクラスメイトからは
「お前のせいで勝てなかった」
「お前の代わりに俺が出てやるよ、だからお前はベンチでやすんでな」
そんなことばかり言われ続けたせいか、僕は体育の授業がいつしか嫌いになっていた。
グラウンドで、サッカーや野球を楽しんでいる生徒達を教室の窓辺から眺めながら僕は、なんであんなただ疲れる
だけの競技を楽しそうにできるのだろうと常々思っていた。
ため息ができるだけの毎日。僕にとっての小学校生活は正直言って

ほとんど灰色の日常同然だった。

小学生時代といえば、人にとっては一番嫌な時代だと僕は今でも思っている。

なにしろ、トイレで大きい方をしているのがばれただけでいじめの理由になってしまうのだから。

僕は運動ができないというだけで、からかわれたり、時にはいじめられてたりしていた。

そしてより運動が余計に嫌いになっていった。

小学校5年生の頃。僕のクラスには一人の体育がとても好きなクラスメイトがいた。

名前は……深山（みやま）だったかな。深山はいかにもスポーツマンといった感じの人物で

三度の飯より体を動かしている方が好きだといってた。彼は体育の時間でも一番に活躍していたし

昼休みでもクラスのみんなを集めてサッカーや野球に興じていた。

僕は当時そんな彼のことが大嫌いだった。彼はいつも自分を見下しているようにみえたからだ。

あるサッカーの授業の時。

その日はサッカーの授業だった。自分は表面上はボールを追いかけるふりをしているだけだった。

たまたまゴールに近い位置にいたとき深山は、僕にパスをした。

でも、僕がシュートを決められるわけもなく、あろうことか敵チームにパスをしてしまった。

結局その試合は負けて、試合が終わった後深山を含むチームのみんなが僕に問い詰めてきた。

「君さ、せっかく僕が君にいいところ見せようと思ってパスしてあげたのに、

どうしてあそこでシュートを決めなかったんだい？　パスの出し方が悪かったならごめんよ」

深山は僕にそういった。深山には怒っている様子などは見受けられずただ単純に疑問に思っているだけだった。

「そ、それは……」

僕は何とか返答をしようとすると、他のチームのメンバーが次々と言葉を発する。

「今回だけじゃなくて、前もそうだったよな。もうお前はずっと見学しておけよ。そっちの方がよほどチームのためだぜ」

「違いないぜ、なんたって敵さんにパスするくらいだからなぁ。あはははは」

「違いない、あはははは！」

深山を除くチームのみんなは、みんな僕を指さしそして嘲笑うのだった。

深山は何処か後ろめたそうな表情をしていた。

でも、僕はそのとき、一番怒りを覚えたのはあろうことか僕にパスをした深山だった。

僕はその日から深山に対して恥をかかせた事に対する仕返しをしたいと思うようになってしまっていた……。

4―5．　きっかけ2

仕返しをしようと決めた日の次の朝の教室。
僕は朝早くに登校した。教室のドアを開けるとそこには誰もいない。
（いつも、こんなに静かだったらいいのに。そしたらゆっくりと本が読めるし）
自分の机の引き出しの中に教科書や筆記用具を入れた後、僕は深山の机の方に向かった。
そして深山の机の引き出しを開ける。そこには、乱雑に教科書や筆記用具が置かれていた。
（やっぱり置きっぱなしにしていたな……これを隠したりしたら、深山は困るだろうな）
僕も昔は、教科書とかを机の中に置きっぱなしにしていた時期があった。でも、クラスメイトから
何度か隠されたり酷いときにはゴミ箱の中に捨ててあったりした。
だから僕は常に
勉強道具は持ち帰るようにしたのだ。
隠されたり捨てられたりしたときのみじめさは、今でも覚えている。
だから、仕返しとして深山にも同じ思いをさせてやろうと思い立ち、こうして朝早くに来ている。
（……隠すだけなんだ。深山の悔しがる顔さえ見れればそれでいいんだ。満足した後に元に戻してあげれば
問題は無い……）
僕は深山の教科書を手に取る。そしてどこに隠そうか考える。

そこで思い出す。かつて教科書を隠された時の頃を。
それは授業の時。国語の授業の時だった。
「じゃあ、次は佐藤君。続きを読んでください」
「……すみません、教科書忘れました」

「あら、また忘れたの？　昨日も忘れてたじゃない。まったく、しょうがないから予備の教科書を貸してあげるから。明日は絶対に忘れないように！　分かったわね？」
「はい……」
背後の席からクスクスという笑い声が聞こえてくる。
きっとその笑い声は、僕の教科書を隠した奴らに違いない。
そのときの感情は今でも覚えている。許せなかった。人の物を隠して楽しむなんて酷いことだと思った。
――でも、ぼくはそいつらと同じ事をしようとしている。
木は急に恐ろしくなり、深山の教科書を元に戻す。
「なんてことをしようとしていたんだ。僕は……」
そもそも、何故深山に仕返しをしようと思ったんだ？　恥をかかされたから？
じゃあ、深山は僕に恥をかかそうとして、僕にパスをしたのか？
……違う。深山はそんな奴ではない。
深山は、以前隠された教科書を一緒に探してくれたことがある。
それだけではない。一人で昼食を食べているとき、僕の席の前に立って
「一緒に食べてもいいかい？」と誘ってくれた。
深山は誰に対しても、優しかった。そして誰からも好かれていた。
結局、僕は深山がうらやましくてしょうがなかったのだ。
運動ができて、気配りができて、誰からも好かれる。僕はそんな彼に対して嫉妬していたのだ。
そしてそんなつまらない理由で、深山に対して酷いことをしようと

していた。

「……うっ……うぅ……」

目から、涙があふれ出る

運動もできなく、友達もいない自分が情けなくて。

自分の嫉妬だけを理由にして、酷いことをしようとした自分が醜くて。

僕はしばらく誰もいない教室の中で、一人声を殺しながら泣いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9178n/

勉強部

2011年11月8日05時22分発行